



境界あれこれ

12

～ 子育て中や学校での褒めと叱責 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

<はじめに>

先日、あるお母さんが次のようなことを話していた。「学校の先生が子どもを名指して通信上で褒めてくれるのだけど、子どもはそれが嫌だという。頑張らなければ褒められないけど、一度褒められてしまうと、もっと褒められるように頑張らなくちゃならないから辛いのだそうです。」と。

怒鳴りつけたり、叱ってばかりよりは、褒めることも大切だと思っていたが、どこまで褒め、どこまで叱ればよいのか、私の中でも悩ましくなったので、それについて書いてみようと思う。

<先生方の関わり方>

お母様方からよく相談されるのが、先生方の関りである。幼稚園や小学校のことが多いが、時には中学校の担任の話も出る。大抵は、先生方が厳しすぎる、大きな声で怒鳴る、である。叩くは論外だが、立たされる、教室から出される等、子どもたちが学校を嫌がるようになる内容だ。更に、えこひいきの問題も相談されることがある。お気に入りを作ってしまう先生はそう少なくない。気に入られた子は頑張り、気に入られなかった子は不貞腐れ、態度が更に悪くなってしまうこともある。そうした結果として不登校傾向になった子ども

ももいる。

子どもたちから直接相談されることもある。「〇〇君は、君付けで呼ばれるのに、自分は呼び捨てだ。」「同じことをしても、〇〇君は叱られないのに、自分は叱られる。」「あの先生は差別するから嫌いだ。」等々。

子どもの目から見た話だから、事実ばかりではないかもしれないが、通信を見せてくれた保護者もいた。そこには、前述の様に、名指して「△△さんはテストをこんなに頑張りました」、とか「□□君は、家庭学習をこんなにしました」など書いてあった。それだけならともかく、名指して「××君が、忘れ物一番。」「〇〇さんは家庭学習ワーストNO.1」なども書かれている。

名指して褒められた方は嬉しいかもしれないが、ネガティブな意味で載せられた方は、恐らくその通信をくしゃくしゃにして捨てたか、正直に家に持って帰って、更に保護者から叱られたかのどちらかだろう。

「褒めて伸ばそう」とか、「一人一人の個性を大事に」とか、教育現場では色々なことが言われてきた。しかし、先生方の中には「褒める」＝「甘やかす」ととらえ、「絶対に褒めない」と豪語する方もいらしたし、スクールカウンセリングさえも「甘やかすから」という理由でつないでもらえないこともあった。特に中学校では、規律で、厳しく躰けていこうという生徒指導的な関りが強く、褒めることは小学校よりは少なくなる。

褒める量で言えば、幼稚園、小学校、中学校、高校の順に少なくなっていくだろう。「褒める」より、年齢と共に、「認める」に変わっていくが、それも年齢が高くなると認められることも少なくなる。

褒めるにしろ認めるにしろ、先生方がプラスの関りを多く持つと、子どもたちは甘やかされてダメになるのだろうか？褒められたり認められたりすることで、嫌な思いをする子はそういないと思う。どんな子も、褒められたり認められたりすると、はにかんだり、嬉しそうにしたりする。そし

て次も頑張ろうという気持ちになっている。多くの子がそのように思う。

しかし、子どもたちが生き生きとして、積極的に、まとまりの良いクラスの様子を見ていると、褒めたり、認めたりだけではなく、しっかり叱っている。ということはすなわち、昔からある、「飴と鞭」という言葉のように、褒めたり認めたりという「飴」と、注意したり叱ったりという「鞭」の両方が必要なのだろう。そのバランスが、学校での子どもたちの自己肯定感をあげ、より自信をもって、成長させるのではないかと、小中高及び専門学校のスクールカウンセリングを通じて感じて来た。バランスといっても、具体的に何パーセントの飴と何パーセントの鞭と数値で表すことは難しいと思うが、幼稚園等では恐らく9；1くらい、小学校低学年では8；2くらい、高学年では7；3、中学校、高校では6；4から5；5くらいだろうか。もしかしたら、もう少し飴が少ない方が良いのかもしれない。というのは社会がそもそも飴が少なく鞭が多いから、それに順応できるように、子どもたちを育てていくとなると、鞭を増やして慣らさなければならないということがあるだろう。社会がもし、もっと人を認め、伸ばす関りを保つのであれば、叱られる割合は少なくなるかもしれない。

＜家庭における関り方＞

では家ではどうか？

1歳くらいまでは、何をしても叱られることは殆どなく、むしろ褒められることが多い。物をつかめたと言っただけでみんな喜び、言葉を何か話したら、また褒められるし喜ばれる。這い這いした、立った、歩いた、等々、出来ることが増えるたびに褒められたり喜ばれたりする。正の刺激による強化で、どんどん出来ることが増えていく。

ところが、1歳を過ぎるあたりから、様子が変わってくる。「いやいや期」や、好奇心が旺盛に

なるためにいたずらが増える1歳半から2歳半の間、場合によっては3歳ごろまで、親は困って叱ったり、場合によっては手やお尻を叩いたり、怒鳴ったりということが起こる。危ないことはしっかり叱らねばならないが、今まで叱られたことがなかった子どもたちは、急に叱られて、何が何だかわからないだろう。

そして、言葉の理解が進むにつれて、行動上の問題は、親の言葉である程度コントロールされるようになるが、言葉での反抗や、態度など、親の思い通りにならなくなることで、親は褒めたり認めたりをどんどんしなくなり、叱ることが増えてしまう。5歳ごろからは、褒められるより叱られる方が多いかもしれない。

小学校に入ると、勉強の問題も加わり、宿題をやらせたり、お稽古事や家庭学習、毎日の学校の準備、提出物、等々、褒められたり叱られたりの割合をみると、叱られる方が多くなるのではないかと思う。そして、中学、高校になると、何かで賞を取ったとか、成績が上がったとか、特段目立つプラスのことでもない限り褒められたり認められたりすることは殆どなくなる。

一般的な家庭ではこんな感じであろう。

一方家庭によっては、子どもを誉め回すように育てている家もある。「〇〇ちゃん、凄い凄い」と何をしても、幾つになっても褒めまくる。子どもは褒められることだけを考えて行動するようになったり、或いは、反抗期ごろから、いくら親が褒めても全く喜ばなくなったりする。

学校では、1-2年で、担任が変わったり、小学校から中学校へなど、進級、進学によって、担任や先生方が変わるが、家庭においては、多くの場合変らないし、親が自分の子育ての問題に気付いて変化するのも中々難しい。

学校では厳しく叱られていて、家では甘々で関わられると、学校での不満やストレスを家で発散する内弁慶タイプになったり、或いは厳しい学校生活になじめず不登校になってしまう可能性は否めない。

逆に家で厳しくされて、良い子を演じ、外では問題行動の多い外弁慶タイプも見受けられる。

厳しさも、甘さも、また褒めることや認めることと叱ること、注意することには、やはりバランスが大事なのだろう。

<褒める・認めると叱責の境界は?>

この様に考えてくると、褒めることや認めることの弊害を考える必要があるのだと思う。いつも認められる・褒められる子は、もしかしたら、ずっと良い子で頑張り屋で、認められる行動・褒められる行動ばかりをとることに疲れてしまうのかもしれない。叱られることばかりだと委縮するとか、自己肯定感が下がるということから、子育てにおいては、褒めること・認めることがずっと推奨されてきた。そのことが、むしろ、叱られることへの耐性を弱くし、ずっと良い子でいることへのフラストレーションを抱えさせることになっているのではと思う。

どんな人間も、こころの中には色々な自分を持っている。怠けたい自分も、小さな悪いことへのスリル感を感じたい自分、いたずらをしてみたい自分、ダラダラしていたい自分、思いっきり怒鳴ってみたい自分、悪口を言いたい自分、等々、ネガティブだったり、悪だったりする自分、こころの中のダークな部分を抱えている。それを表面化させるかどうかは理性の問題だけである。ダークな部分も含めて自分であり、そんな部分も受け入れられることも大切なのである。

良い子、反抗しない子、親の言うとおりに動く=素直な子を押し付けられた子どもたちは、息苦しく、こころの中のダークな物をどうしてよいかわからず、無理やり押さえつけたり、そういう感情を持つことへの罪悪感を持ってしまったりしている。反抗期も弱かったり殆どない子が増えていくのもそんなことからきているのだろう。

少子化やそこそこ経済的に困っていない家庭

が増えたことによる影響なのか、親は子どもたちをよく見ている。よく見られればみられるほど、悪い自分を見せられなくなる。程々に忙しく、子どもを程々に放っておけると、子どもたちの自我が強くなっていく。超自我にコントロールされる自分ではなく、自分自身で考え、行動し、責任を持つ自分を育てていくには、年齢に応じた手放し、目放しが必要になる。そうした状況下での褒めや叱責は、親も内容を吟味して行うようになる。見ていないところの問題は、褒めるにしろ叱るにしろより慎重にならざるを得ないからで、そうすることで、より効果的な褒めや叱責になるだろう。

滅多やたらに、なんでも褒めたり認めたりするのはなく、よく内容を考えて褒めること、認めること、叱責することを実践していくならば、学校であっても、家庭であっても、子どもにとって苦しくない、肯定的な自分を持てるように働くのではないだろうか。

はじめに述べた、苦しいと訴えていたお子さんのようなことにならないためには、物事がわかるようになった子どもに対し、内容を親が良く考え吟味した上で、褒める・認めるを実践し、また、その効果を上げるためにも、悪いこと、間違っただ行動に対し、きちんと叱責できることが必要なのだと思う。健康な中学生が、1人で服を着られたとしても、それは称賛に値しないだろうが、友人の悩みを真剣に聴き、慰めたり適切な助言ができたとしたら、それは称賛されるだろう。親にもそれぞれ、褒める・認めるべき内容の指針があるだろう。境界は人それぞれにはなるが、その子どもの発達年齢相応或いはそれ以上の認められるべき行動や結果を出したときには、しっかり認め、称賛するべきであろうし、又その子どもの発達年齢に対し不相応或いはそれ以下の行動や結果についてはしっかり叱責したり説諭することで、その境界が形作られていくのではないかと思う。